

佳作

肉の躍り

古賀野直樹

1

服は脱げても身体は脱げない。生きる限り、心は絶対換えられない。逃げて、逃げて心はこっちにやってくる。裸は実に危険だ。もうこれ以上脱げない。その事実が恐怖になる。全てが違和感に包まれる。当たり前前の動作のひとつひとつに違和感が生じ、身体にまとまりが無くなってゆく。舌さえも煩わしく感じる。生物マシンは運動の環が少しでも狂えば、ジェンガみたいに崩れるのだ。

一人で違和感に悩むことはなんともない。いつも起きることがまた起きる。決まった思考のパターンに任せておけば違和感はず過ぎ去った。だが友人のSは、僕の思考の環を破壊して、僕を違和感から逃れようのない状況に陥れた。

「心の弱いやつはクズだ」

この題目を反復し、Sは僕の中で、不安と恥を結びつけた。しかし、そのS自身が闇に落ちた。Sは入院した。精神病である。僕は、彼が病気になった直接の原因を知らない。ただ心

当たりはあった。彼は見知らぬ女を妊娠させていた。

ある日、K市を訪れたSは、あふれ出んばかりの性欲を満たすために、見知らぬ女を誘った。都合のいい場所がなかったため、彼は障害者用のトイレでそれを実行することを女に提案した。閉店間際のショッピングセンターに入り、一階、二階、三階とトイレを見て回った。どれも同じだった。なかなか行動に踏み切らない女のための時間稼ぎだった。

Sは四階のトイレで強行突破を図った。「途中、警備員が見回りに来たんだ。警備員はギョツとして、ソロリとドアを閉めたよ。そのとき嫌な感覚がオレの股間にあった。もしかしたら失敗したのかもな」

その時のことを、冗談めかしてSは僕に話した。彼の顔には曇りがなかった。どうやらうまくいったと思っっているらしいかった。しかし、数週間後、Sは蒼い顔をしていた。彼は失敗していた。相手から連絡が来たらしい。予期せぬ状況に陥って、彼はどうしよう、どうしようかと困惑していた。「無視したらネットではらすぞと言っんだ」

不用意に携帯電話を女の自由にさせてしまい、名前も大学名も知られていた。

結局、Sは実家に住む両親に助けを求めた。彼は親に、いったいどんな説明をしたのだろうか。女とも和解が成立した。だが、彼は恥辱に打ちひしがれながら生活することになった。和解が成立したといえども、女が誰にことを漏らしたか知れない。Sは周りの人間の顔の筋肉の運動に敏感になり、他人の目と声に怯えながら生活した。不安にさいなまれ精神的に不安定になった。

雨がだらしなく降り続けていた梅雨のある日、夜明け前に帰ってきた彼は、コンピュータでウェブ上の動画を何本か見た。その中に、イスラムの過激派が作成した、裸体の白人男性を処刑する動画があった。グルグルに縄で縛られた白人が四人の兵士に囲まれていた。

アッ アッ アッ

頭を打ち砕かれた白人は呻いた。黒っぽい色をした血液が、

ピッ ピッ ピッ

と散った。ひび割れる頭部からは、内容物が見み出していた。頭の原形を失い、ゼリーのようになりとへたれた白人を、イスラムの兵士たちは抱え上げ、その悲痛な死相をカメラに突きつけた。彼らは激しく、全世界へ何かを訴えかけていた。

その映像の陰鬱なリズムに、Sは共鳴してしまった。まるで、

画面から出てきた手によって全身を手淫の如く刺激されたように、不安を一気に噴出させた。

Sを最初に発見したのは、僕だった。Sはグネグネと身をゆすり、頭を砕かれた白人同様に呻いていた。僕はSをタクシード病院に連れて行こうとした。しかし、Sはおびえながら、車に乗るのを激しく拒んだ。暴れる彼の手があたって、唇を切ってしまった。

結局、僕は救急車を呼び、隊員と協力して彼を病院に運搬した。救急車が病院に到着したころには雨が止み、日が出ていた。病院に運び込まれる彼を、鬼の面をしたものすごい太陽が焼き殺そうとした。雨上がりの真つ黒なアスファルトからは、透明な湯気が立ち上がっていた。

Sが落ち着きを取り戻したのは、搬送から二日後だった。僕は彼と面会した。ベッドの上で仰向けに寝ている彼には、人体を傷つけるような能力は感じられない。喉がけだるく沈みこんでいる。まるで煙のようだった。

「お前も人ごとじゃないぞ。ちよつとした不安で一気に穴に落ち込んでしまうんだ」

Sは僕に警告した。

「お前自身がこうなるなんて、思ってもみなかった。高校時代に病院送りにした子のことを覚えているか？」

Sが発狂して以来、僕は人間のことを思い出し、深く考

えていた。

「やっぱりそいつのことを思い出したか」とでも言わんばかりのSの表情。彼自身も僕と同様に、今回の一件によって、その子のことを思い出していたようだった。

「覚えているよ。あの子は確か父親の子どもを墮胎していたんだ」
お互い知っていることだから、ここでどうとうとそれを確認する必要はない。Sはその子のことにはそれ以上触れなかった。ただSは「何かしらの恥は発狂するための肥やしになるよ」と、彼とその子の共通点を付け加えた。

女子生徒の話はそれだけだった。Sは雑感を語り始めた。「精神の病に対して、世間はさも理解があるように振る舞うが、やっぱり笑いの種なんだ。恥だよ」

医者や看護師、見舞いに来た両親から感じられる嫌悪感を念頭に置いていたようだった。彼は身を持ってそれを実感したのだった。

「生きることにそれ自体が、とんでもない障害になるんだ……。狂人として人生を組み直さないといけない。今までも人生のビジョンを持っていたが、その前提が崩れたわけだから、それに進んでは行けない」

「狂人としての人生とは、どんな人生？」

「まだわからない」

面会は三十分ほどで終了した。僕が病室を出るとき、Sは「出会いは三十分ほどで終了した。僕が病室を出るとき、Sは」
Sは女子生徒を葬る過程で、彼女がどんな言葉を嫌がるのか、知識を蓄積していった。その時は、彼にはそれらの言葉の意味が心に響かなかった。その蓄積された言葉の真意が今、彼の身にも響かなくなってフィードバックされているに違いない。そして、その知識は僕にも共有され、僕自身にも実感となってフィードバックされているのだ。女子生徒を追い詰めた言葉と「心の弱さは恥」という題目。彼の言説は、僕の潜在的な不安を疼かせた。まるでSを追い詰めたあの、画面から出てきた白い手のように、彼の言葉は僕の不安を逆撫でした。

不安を外にさらけ出せば本来は楽になるはずだが、そんなことができないはずがない。僕の告白を彼らは善良そうに見える、巧妙な笑みで受け入れるだろう。しかし、僕も直ちに厄介者になるに違いなかった。

僕にとっては不安そのものが恥辱だ。それはSによって、幼い精神に反復して植えつけられた感情だ。

それでもSと親しくしたのは彼の俗的な部分にひかれたからだ。彼と行動していれば違和感など忘れていられた。何かに没頭し、視線を外部へ解き放つときのみ、自分をどこかに据え置ける。ショッピングセンターで性交するような、彼の茶番を見つめることが救いだっただ。

だが、そのSが発狂した。僕の外部へのパイプは断たれ、絶えざる内部探索が始まる。Sのような凶太い人間ですら、発狂した。まして自分はSよりもろい人間だ。いつそうなってもお

席を頼む」と僕へ吹き、大学生生活への復帰の意思を見せた。

同室にいる中年の男が、看護師にちよっかいを出していた。

病室を出てから駅に着くまで、僕は例の子のことを考えた。

彼女はある時期、高校を長期間休んで入院した。彼女が一体何の病に陥ったのか、担任教師から説明はなかった。しばらくして、彼女が父親の子を墮胎し、同時に精神も病んだという噂が、何処からともなく流れた。

女子生徒が退院しても、周りの人間は、社会のリズムからはじき出された者に対してどう振る舞えばいいかわからない。彼女はふさがりかけた傷のように扱われた。このときSがとなえ始めたのが、あの題目である。

「心の弱いやつはクズだ。心の弱さは恥だ」

この言葉は指針がないために困っている人間たちに見事に共鳴し、Sの価値観はクラスを支配した。教室に、ヒシヒシと嫌悪と嘲笑の空気が流れた。

女子生徒は、たいてい休み時間は自分の席で突っ伏している。その耳元でSがさまざまな言葉を囁く。女子生徒が嫌がって身をゆすつても、なお囁き続ける。嫌がる女子生徒の耳元で、不快な言葉を次々と発する。Sはケラケラ笑った。

女子生徒は不登校に陥り、さらに再入院した。そして、最終的に学校を去った。その後、彼女がどういう人生を歩んでいるかは分からない。

かしくない。

回想によって不安が蘇ってきた。歩きながら自分が確実に狂気の闇に進んでいるを感じた。

駅に着いた。いくつものエレベーターを乗り継ぎ、地下の奥深くに沈んでゆく。自分の四方を覆う何枚もの厚い壁が意識された。

列車は暗闇から姿を現し、悲痛な呻き声をあげながらホームに滑り込んできた。地下の脱出不能な空間で、何百人もの人間が運搬される。

空間が重なるごとに、さらに壁という壁が意識される。壁の外にも壁があり、その外にも壁がある。生きていることそのものが密閉空間にいるのと同じで、地下鉄はそのことを如実に表している。果てしなく長い鉄管。僕の身体が、ぴつたり入るくらいの鉄管。その中央部にいる。そんな感覚だ。

僕は逃げられない！ しだいに呼吸すらも意識化され、身体感覚にまとまりが無くなり、身体が今にも飛沫を上げて消えそうになった。今そのように爆発したら、いったい誰が僕を保護してくれる？ 失神への恐怖が襲ってきた。

「ああっ」

極度の緊張から、潜在していた尿意が激しく膀胱に突き上げていた。不安が螺旋状に急降下した。恐怖に腿の筋肉がどうしようもなく緩み、僕は失禁した。ドアの方へ向いた。列車はま

だ真つ暗な地下を走行中である。尿の臭気を周りに感じさせまいとしたが、恥の悪臭は僕の熱に焚きつけられ、容赦なく立ち込めてくる。隣に座るピンク色の肌を露出した女が、顔をしかめて、臭いの分子を鼻孔に吸い取ろうとしている。顔にうまつた二個の眼がグルグル動き、発生源を探っていた。僕は失神への恐怖と恥辱に耐えた。

駅についた。重なる壁を何枚も剥ぎ取るように構内を走り抜け、地上へ脱出した。まるで「恥辱」と書かれた壺に入った液を口に流し込まれるようだ。やがて僕は、その液によつてみるみる膨れ上がり、黄土色の毛をした豚になる。

世界と、身体の中を満たし、僕を内と外から包んでいた空気が、全てゲル状になったようだ。粘度の大きいその物質は、僕の身体のいたるところで詰まって、動けなくなる。僕の身体はパンパンに膨れ、衝撃的に破裂するのだ。

Sが女子生徒に浴びせた言葉と、S自身が精神を壊したという事実は、僕の中にある敏感な、流れをもった髪のある部分を白い手がゆつくりと逆撫でする。その感覚に僕はびくびく震え、音にしようのない精神の声を上げる。再起不能なまでに破壊し尽くされた精神ともに、僕は死ぬまで生きなければならぬ。あと何十年も、これと付き合わなくてはならないのだ。

突然僕は、自身が生の末端に立つていることに気付いた。生きていくことがこんなにも気持ち悪いことなんて。平衡を保つのがこんなにも難しいなんて。Sの言う通り、生きることそれ

のだ。

しつこい太陽が沈み、宇宙色の空が広がった。日光によつて隠べいされていた星たちの姿があらわになる。蒸し暑い空気がべつとりと、地上に漂い、上空では、裸形の満月が緊張して輝いていた。

2

大学で授業を受けるも、違和感にさいなまれ、まともに集中できなくなつた。大教室の固定された椅子と机が、垂空間の方を向いた拷問器具のように思えてならない。外に出ても同じだ。まるで、街中に緊張のネットワークが張りめぐらされているようだった。散在する狂気への入り口に怯えながら生活し、生きながら死人になつた気分だった。

僕はアルバイトをしていた。食肉加工、鶏肉の皮を剥ぐ仕事。コンクリート床の作業場、その中央には山盛りの鶏肉がある。それを囲むように、銀色のテーブルが配置されていた。テーブルの上には一メートルほどもある巨大なまな板と、大きな包丁があった。真つ白な作業着に、抗菌キャップとマスク。肉が次々と僕の所に移動してくる。鶏肉たちは白い筋を硬くして叫びさうだ。鶏肉の皮についた点々を見ると、生前の毛を連想する。

僕はこの仕事のスペシャリストになつていった。しかし、何の

自体が障害になつていた。自殺の衝動はこのようにやってくるのかもしれない。それなら、自殺も正当化される。自ら命を絶つのは罪という考えは、生命の維持が障害にならない健康な人間の欺瞞だ。

分解しつつある自分を必死でかき集めながら、自宅を目指して歩いた。広い空間に身を置くと、いくら落ち着くが、それでも正常ではなかった。ここで失神したら、僕は風に打たれ、雨にさらされ、やがて死ぬだろう。

コンビニで水と、ついでにパンを買い、公園の中を歩いた。ベンチに腰掛け、水を一気に半分飲み干した。パンは一口食べただけで食欲が失せた。

僕はパンを投げ捨てた。浮浪者と野良犬がそれに駆け寄つた。浮浪者と犬はパンを挟んで睨み合い、一瞬沈黙した。ホームレスは足元にあつた石を思いっきり犬に投げつけた。投石を胴に受けた犬は、身体の何処から出たのか分からない奇音を発し、よろめきながらどこかへ消えていった。ホームレスはパンを一心不乱に、涙を流しながら食した。その姿は、社会の根本的なリズムからはじき出された将来の僕やSのようだった。

公園を出て大通りに出た。下り線を多くの車が走っている。道路は血管、車はそこを流れる血液のように、ベッドタウンへ走つて行った。昼間、貧血状態だった街は、ドライバーたちの帰宅によつて、冷めつつある僕と対照的に、ぬくぬくと温まる

メリットもない。真理に向かうわけでもなく、自分を表現するわけでもなく、聖なるものと一体化するわけでもなく、欲望を満たすわけでもない。その代わり、鳥たちが僕の内面を、僕自身に強制的に詮索させる。白い筋を緊張させて「お前はお前の中をみる」と。首をカクカクさせて死を待っているだけの鶏どもが、肉になつて僕を脅かす。僕のしていることは、肉の皮を剥がすと同時に自己の解体作業だ。

ある日、僕は大きな包丁で指を切つた。失禁の件について考えていたことが原因だ。あのピンク色の肌の女が、僕の失態に気づいていたのかどうか考えていた。女の顔を何度も思い浮かべ、表情を解釈する。僕はどうしてもあの件を自分の中だけの恥にしておきたかつた。

ツンツンという変な感覚が左手に走つた。続けて手が変に冷たく感じられた。見ると大きな肉の口がパッキリと、僕の顔の方に開いていた。左手を右手でものすごく強く握り、その右手の甲を思いっきり噛んだ。作偽的な痛みをつくり、左手の激痛を隠そうとするも、左手の痛みはそこを通りぬけ、悪魔のように行進してきた。僕は「あっあっ」と叫んだ。

流れ作業は容赦なく持続する。肉が僕のもとで停滞する。僕は、動物の作為に負けた情けない人間だ。

「どうした？」

主任が声をかけてきた。

「見ての通りです」

僕は傷を主任に見せた。彼はとくに驚かなかった。「これじゃあ無理だね。病院に行きたまえ。それから、肉を血で汚したんだ。給料から引かせてもらうよ」

僕がだいぶ興奮している割には、周りの人間には、傷は簡素に見えるようだった。

Nが病院まで送ってくれた。Nは僕と同じ平成元年の生まれである。僕と同郷で、中学の頃の同級生だ。彼女は今、学校に通っていない。食肉加工場の正社員である。Nより他の社員とは、あまり口を聴いたことがない。中年労働者が送りつけてくるのは切り刻んだ肉だけだ。

「大丈夫？」

Nが貸してくれたタオルを左手にグルグル巻き、作業着を脱いで、加工場を出た。

すっからかんの青空が広がっていた。僕の実在を唯一保障する、海苔のような影。白い太陽が熱で僕の傷を腐らせようとした。

圧倒的な白いコンクリートの建物たちは、太陽にカッと照らされて、不快な光線をまき散らしていた。僕らはベットリとアスファルトで塗り固められた黒い道を歩いた。

その日、Nは素足だった。膝より下の柔らかな肌があらわになっていく。踵の高い履物を身に着けていたため、太ももから脛、脚の甲に至るまで、美しいラインができていた。

の子どもを墮胎した女子生徒は、この何倍もの血を手術の最中に流したに違いない。この量でもこの痛さ。僕は自分の感じた痛みと、女子生徒やSの子を墮胎した女の感じた痛みを比較した。

頭の中が混沌としてきた。

間違いなく、目の前の血は、僕の肉から流れ落ちたものだ。しかし、出産時のような姿勢をとっているNの脚の側に落ちたことで、それは僕の肉の口からあふれる血液でありながら、同時に、彼女の身体から出てきた血液を連想させる。いつしかシートのシミは、それらふたつの混合物のように思えてきた。

一点のシミが、心臓のように鼓動しながら僕に差し迫ってくる。鼓動によってさまざまなイメージが生成され、押し広げられる。シミの鼓動は、僕の心臓のそれと不調和だ。入り混じる他者の血液、その中に、赤ん坊が見える。猿が見える。蛙が見える。魚が見える。魚は原始の海を泳いでいた。

痛みと情景、そして連想によって、僕の意識はどこかへ旅立ち始める。僕の頭の中で、まだ見ぬ生理が起こっている。不安物質が次々と生み出されて、頭がいつばいになる。ああ、脊椎の先っぽに、豆のようについた脳を取り換えない！息が荒くなり、口の中が粘っこくなる。原色が渦巻く頭の中で、不快感が百万匹の蟻が如く行進した。

Nは起き上がり、顎をほんの少しだけ上げ、唇を誘うようなそぶりを見せた。何か救いのようなものを感じた。僕たちは、

Nは二十代前半の美を開花させようとしていた。自分の花開く方向へ、何の作為もなく、ただそれに身を任せる天然の女の子。内部から自発した美しさは、地獄に引きずりおろしても、容易には壊れまい。同じ年月を生きていながら、格段に違う自分とNの充実度を思い、僕はNに嫉妬した。

「ちよつと休憩」

病院たどりつく前に、どうしようもなく気分が悪くなり、途中にある僕の部屋で休むことにした。

Aパートのドアを開けると、暗闇の中から、よどんだ空気が玄関まで押し寄せてきた。カーテンを開けると、太陽が、窓際のベッドに掛けたシーツを真っ白に発光させた。

靴を脱いだため、Nの脚のラインは崩れ去った。彼女のふんわりとした足が床にべったりとつき、フローリングから離れるたびに、ねっち、ねっちと肉の音が奏でられる。香水の香りではない、頭皮から放たれる、シャンプーの、無作為の芳香。この暑さのせいか、Nの頬と唇はリングゴのように発色していた。発汗によって前髪が濡れ、額に張り付いている。やさしくふくらんだ尻。黒々とした眼。幼いが女性らしい丸みは十分に備わっていた。

Nは太陽に包まれたベッドに飛び込んだ。

一方で、僕の傷は確実に疼いていた。本当に痛い。肉の口は真っ赤な顔で僕を見ている。ベッドに僕の血がこぼれた。父親

二組の唇と二枚の舌でなし得ることを全てなした。連想の渦は消えていった。

しかし、それ以上のことはなかった。これは僕にとって都合がよかった。彼女の裸体を見れば、たちまち原始に連なる透徹したイメージが、ものすごい力を持って再び訪れ、僕をどこかへさらっていくような気がしたからだ。そして、Nも、Sの相手をした女のようなリスクをわざわざ負う必要はないのだ。

「落ち着いた？」

「うん。大丈夫」

「よかった」といって彼女は笑った。

「こうやって正面から話すのは久しぶりだね」

「そうだね。どれくらいぶりだろう」

僕は、人間の温かさのようなものに触れ、とことん恥をさらけ出したくなった。例の話を切り出してみた。

「この間、初めて失禁した」

少し間があったが、Nの顔に作為は見られない。

「恥ずかしかった？」

「うん。でも……」僕は続けた。

「僕は性が確保されていれば、どんな恥辱を受けてもいいかもしれない」

「どうして？」

「多数派の価値観はたぶんそうなんだ。テレビドラマでみるよ

うに。表面上がどうなっても、根本的なところで救いがあればいい」

手で触れられないから、言葉でNを撫でた。僕はNに暗に救いを求めた。性欲と混乱が交錯していた。

「なんだか、温かそうだね。それはたぶん、もう恥辱じゃないよ」
Nは困惑の気配ひとつ見せなかった。

「確かに。快感に近いのかも」

彼女を見ると、自分が大きなものの流れの中にいるように感じる。深遠な身体の中へ、深く入り込めば、彼女に身をゆだねれば、僕はどこかへ行けるのかもしれない。

「大丈夫」と言ったものの、血液は、なおジトジト流れていた。

「病院には自分で行くよ」

別れを惜しみ、Nを見送った。

「バイバイ」

喜びのウサギのようにNは帰った。Nの方でも何か精神的な収穫があったのだろうか？

携帯で時間を確認すると、既に六時を過ぎていた。容易には沈まぬ夏の太陽が粘り強く照らす十八時の街は、優しいオレンジ色をしていた。柔らかい空気は驚くほど澄んでいて、地平のはるかかな先を見つめれば、異国でも見えそうだった。このまま夕暮れがいつまでも続きそうだ。昼間の灼熱と僕の間と和解が生じた。

身体中の穴から穴へ外気が貫いているようだ。快感が肛門から脳へ衝撃的に突き抜けた。

3

Sが退院した。久しぶりに僕の前に現れた彼は、実にしなやかだった。上半身に無駄な力が入っていない。そして、二本の脚でゆったりと、体重が支えられている。確実な重みと、はっきりとした輪郭をもって、Sはそこに立っていた。

大学構内に流れる人工の小川、その側のベンチに腰掛けて僕たちは話をした。

「オレが入院したところは、ほんとにスリリングだったよ。自分の便で壁に絵を描くやつがいたから、そいつのキャンバスにされないか、毎晩怯えていたんだ」

僕は、彼から病人たちの奇行の数々をきいた。

「普通に生活できそうなのか？」

「まだ正常じゃないが、何とかな」と彼は医者から処方された錠剤を僕に見せた。

「スリリングな面もあったが、病室はなかなか居心地がよかつたよ。同じ体験をしたやつがいるんだから。傷の舐め合いみたいなものだよ。そこでだ。オレは病室を再現したような生活がしたいんだ。オレにしろ、あの女子生徒にしろ、同じ体験をしている。別に特別な体験じゃないのかもしれない。だから、

納得した。彼らは成人だ。社会の最低限のルールはわきまえているはずだ。

ある日、僕はNを誘った。

「面白い試みをしているんだ。一度見に来なよ」

「おもしろそう」

以後、Nは頻繁に僕の部屋を出入りするようになった。

部屋が熟するのは早かった。深遠な空気が流れている。体臭や食べ物臭、コンピュータの金属臭などの混合臭で満ちていた。一流の食べ物や過激な発酵を必要とするように、この部屋の深遠な空気はこの混合臭のおかげでなかならうと思われた。床では、LANケーブルがどぐろを巻いていた。

各々が自分の世界に没頭し、どこかへ旅立っていく。一室がハチの巣のように、見えない壁で区切られていた。

恥を隠すために、狂気から逃れるためにこもる。それは世間とのつながりを断ち、社会の主工程からドロップアウトすることを意味している。食料は僕が買いに行った。僕だけが外部との通路だった。

4

指の傷が回復してきたころ、不快感が再び押し寄せてきた。清らかな空気はどこへ消えた。再びゲルが押し寄せてくる。安

「俺たちはこれから、ここに溶け込むように生きていくんだ」

Sがメンバーをやわらかに鼓舞した。

「何かルールを決めなくていいの？」

僕はなんとなく質問した。

「皆、野蛮人じゃないんだ。自然に秩序は形成される。ルールは必要ない」

定していたころの振る舞いを思い出そうとしても思い出せない。地下鉄での閉塞感や、身体感覚が蘇る。失禁の羞恥も再来した。心の中で気狂いどもが躍り狂う。パッチン、パッチンと、肉の音を立てながら躍る。僕は、外に出るのが恐ろしくなった。僕は皮を剥ぐバイトをやめることにした。主任は、嫌な顔をしたが、若者の無能さを知って得意になるようにも思えた。

一方、部屋の空気は変わりつつあった。おそらく、Sがどんな健康になっていることが原因だ。

その日、彼は黒いハーフパンツと、オレンジ色のTシャツを身に着けていた。脚の皮膚には、豊かに毛が根ざしている。退院直後、蒼白だった腕には、血がみなぎり、気温が高いせいもあって、血管がぷっくり浮き出ている。その姿は、健康で、血気盛んな青年そのものだった。Sはどんな健康になっている。他の人間たちもそうだ。彼らは、世俗的な若者になった。彼らの間には、親密な対話が生まれた。物思いに沈んでいた姿はもう何処にもない。

部屋の中はめちやくちやに散らかり、何もかもが許される、きわめて乱雑な空間になった。

「おい、たまにはお前たちが買い物に行け」

僕は、健康な人間に仕事を押し付けた。

「嫌だよ。めんどろくささ」

Sが粗暴に答えた。

「でも、部屋の中だけじゃつまんない」

Nが異をとなえる。

「そつだな、ちよつと外に出てくるか」

なんとなく嫌な予感がした。けだるさを振り払い、僕は彼らについて行った。

「何だ、ついてきたのか」

僕らはスパーに向かった。国政選挙が公示されたらしく、宗教団体を支持母体とする政党の候補者が、駅前へ停めた選挙カーの上で、ヒューマニズムに満ちた熱弁をふるっていた。人通りの多い交差点の隅では、山吹色の僧衣をきた半裸の僧が寄付を募っていた。

ワイ ワイ ワイ ワイ ワイ ワイ

Sたちはずかずかと、原人が如く行進する。彼らは、選挙の候補者に下劣な野次を飛ばしたり、半裸の僧にわいせつな言葉を浴びせたりと、イタズラを繰り返した。

自然と人間、両者の悪意に満ちあふれたような暑さだった。ここに居る大勢が、日光によって発熱、発汗したことで、一層空気が熱くなり、ジメジメと湿り気を帯びるのではないだろうか。一方で、Nの肌は青々とした豊かな葉をまとった木や空スパーの陳列棚に涼しげに並ぶ果物と見事に共鳴していた。

Sたちは生命力に溢れている。しかし、僕にとつては、ジャガイモの《芽》がこつちを見ていることさえ煩わしい。

「お前、タオルで床を拭いたな！」

僕はしつこくがなり立て、Sを糾弾した。

彼らはひそかに何かつぶやいた。かすかにそれが聞こえた。「隠遁者」という語が含まれていたと思う。彼らは僕を嘲笑した。

衣服と肌の間に、よじんだ空気が滞留している。扇風機は熱風しか起こさない。環境に対する不快感と重なり、Sがどんな憎くなってきた。

その日以来、僕と彼らの間に溝ができた。僕は、彼らを見捨て、ひたすら音楽や画集に没頭した。

ある日、僕が買い物を終え、部屋に戻ると、Aが何やらニヤニヤして、入口の外に立っていた。

「あいつら、やってやがる」

冗談だろうと思ひ、僕は部屋を確認した。確かに、その痕跡があった。交尾を目撃された猫のように、Sは身をひるがえし、僕に「やあ」と言った。

「お前、他人の部屋で何してやがる？」

彼は「イヒヒ」と笑った。いつのまにかNはSのもとに渡っていた。

「いくらNを昔から知っているといえども、Nはお前にとつて未知の女だ」

さまざまな解釈が可能な言葉だった。僕は、Sが牛のように射精する姿を想像し、胸やけがした。

「人が音楽を聴いているのが分からないのか！」

健康な人間どもに対する劣等感もそこに含まれていたように思う。Sたちは少し驚いているようだった。

「拭けばいいんだろ、拭けば」

Sが言った。

「私はこういうことを求めていたの」

Nは僕が聴いたことのない、弾むような声で言った。Nのあの表情。あれは本当にSのことが好きな顔だ。Sがまたも不注意から彼女を妊娠させても、Nは自らの骨盤を歪めながら、Sの子を出産するかもしれない。喜びのウサギは、発情期の気狂いウサギだった。

そして、これこそがSの言う狂人としての生き方なのだろうか？ だとしたら、Nは狂人と共に生きることができ、僕が想像した通りの強い女だ。

彼女は、ありきたりの顔をしている。顔も身体も、すべての筋肉が緩み切り、だらしない。しかし、この突飛な行動によって、彼女は成熟したようで、その緩みきった表情は、奇妙なまでにセクシャルだ。彼女の美は、次の段階へ飛躍した。

SとNのあまりにも充実には、僕は驚き、思わず後ずさりしていた。グシャリと何かを踏んだ。ガラスのコップだった。足の裏から血が出た。

不思議なことに、劣等感が消え去った。むしろ気持ちいいくらいだ。脳が痺れたあと、肛門から脊髄にかけてザリガニが走るような感覚がした。

ああ、これだ。この傷を負ったときに感じるこのどうしようもない不快感が生きている証なんだ。なんて心地いい。

僕は赤ん坊のように脱力して床に座った。そして窓の外の青々とした木々を見た。

「どうしたんだ、こいつ？」

そう言うのはT。

「おい」とAが僕の肩をたたくも、反応する気はさらさらない。土からサツマイモを引き抜いた時のように、

ぽっ ぽっ ぽっ

と、何か得体のしれない、心地よい感覚の粒が飛び出してくる。不快感が消え、陶酔感だけが残った。

「出かけるか」

Sが皆を引き連れて部屋から出て行った。僕だけが取り残された。SとNの突飛な性行動によって、他の人間たちも充実しているようだった。

僕の痛みと、Nがこれから感じる痛みと、女子生徒の痛みと、Sの相手の女の痛み。どれが一番痛いのだろう。

再び連想がひしめきだした。連想は次第に大規模に、具体的になり、窓の外の木々や空に連結し、大きな流れの中に僕を放り込んだ。